



○ 小説
夏の夜の計画 (八枚)

はじめて盗ったのは、拾円銅貨だった。
丁度十ヶづつ積んであるのが六つが七つあって、一諸に数枚が箱の中に散在していたのを三つつまんで手のひらに握った。ま素早く桐の木の内蓋をして、音が小さくて済むようにバネを押さえて、それでも力キツと鳴る蓋をして、まだ息を殺したまま、左右のダイヤルの目盛を元の通り狂わせた。
それから、二階のぼくの部屋に戻る格好をして、階段に向って居間を通り抜けながら序々に呼吸を再開し、三拾円を握った手のひらをズボンのポケットにこするようにして歩きながら成功したと思う。誰も見ていないが、たと思う。

それが、何度目かのある日の夕刻に、背後の茶の間の襖から祖母に見られたと思った瞬間があった。ひんやりとして冷たい重いものが胸を打った。それがらしばらく止めていたが、数ヶ月経ったある晩、何かの拍子に祖母がぼくに厭がらせを言った。ついでにそのことを言った。母は、黙っておかざを作っていたから吃度あの時祖母に言われたのだらう。その時、ぼくは心のちでハッと想って、顔は一瞬真赤になった。と、笑い顔のまま「ぼくは盗らんよ。」と言った。盗ったのは盗らなでええのじやから嘘はつかねえの。あ、あ盗らんかったの。盗らんかったの。ええんじや。と、言っ直ぐに話を変えてくれた。
夏休みの終り頃のある夜、居間の柱時計が八時を知らせると祖母と母は、いそいそと銭湯へ行く用意を始めた。整理筆の前の座に座って、皆の下着の着替えを出しながら、今日は皆一諸に行くから鍵をかけなくてはい。と母が言っているのを聞いて、ぼくは、ぼくは今日

は行かないよ。留守番をする。と。と言った。母が、それは丁度いいといった顔をやる。その時、祖母の横顔に暗い影がよぎるのを見たかも知れない。
父は、あくまで明るく、「行くう行こう。」と誘った。姉も妹も楽しいのかはしゃいでいる。
NHK連続テレビドラマ「あなただけが知っている」のテーマミュージックを背に、彼等はゾロゾロと、突掛けや下駄の音をさせながら出て行った。
ぼくは、テレビのスイッチを切った。ぼくは独りだと思つて何故かうれしくなつて、「じやーん。」と叫び出した。居間に踊り出て、「それから、居間の隣の客室を通って、一段低いコンクリートの事務所に降りた。数ヶ月以前から小さい金庫はロッカーの中段に入っていた。学校から帰って勝手口を回らず、時々、事務所を通るので知っていた。

「ただいまあ。」と、いつも、経理の恐い顔をした大柄な中年女が、「おかえりい。」と、取って付けたような褪せた黄色の声で言った。母は、奥で厚紙の製本を手伝っていた。つまり、母は事務はあまり好きではないのだ。経理の四人の背が見えるコーナーに、社長である父の机がある。昔、と言つても三年程前の小学校四年生の頃、グリコの景品の当る四合の紙片が欲しくて父に拾内もらいにいったことがあるが、その時、従業員の笑顔を囲まれて父は大変うれしそうに顔を上げて、財布からおもむろに拾内を取り出して、ぼくの両手の中に置いてくれたのである。
実は、ぼくは内気で、その日また父に小遣をせがんでもらった。ことはなかつたのだが、その日、姉が、喜ぶがからその位のことではしやれと、ぼくの背中を押したのだ。

で買ってくれと言ったら、記を聞いて笑いながら買ってくれた。居合せた三郎伯父さんと従業員の一人が、「わしにも買つて来てくれい。」と、拾内玉を二人で六つ出して言った。ぼくは心の中で、「ウホッ。」と叫び目を輝かせて走って買ってきた。しかし、夕方もう一度買ってきたら、近所の友達と一諸に友達のを持って行った時、もう要らん。あ、あ、え、行つときなさい。今、お客さんが来ているから。と、追い払われた。
そんなことを思い出した。ピカピカピカッと、天井の十数本の蛍光灯が点いた。誰もいないのに忍び足で歩いた。そっと抽出しを南けて回った。そんな自分には付いて、ガッチャーンと大きな音をさせてロッカーの扉を開けた。「イッヒッヒ。」と、心の奥で言った。深緑色をした例の小さい金庫がそこにあった。プーンとエナメルペンキの湿ったような臭いが、そいつを包んでいた。

中蓋は三つあって、左端が銅貨と銀貨で、真ん中が千円札と五百円札と百円札で、右端が千円札である。
いつものように左端を開けると、今日に限って拾円銅貨が二枚、三枚しかない。百円銀貨は十枚、真ん中のものを南けて見ると、百円札が束ねてあり、その下に千円札が数枚あった。
ぼくは、しばらく居るふりをしていたが、決心したのが、素早く千円札を一枚抜いてポケットに押し込んだ。蓋をして、急いでロッカーの鍵を掛けた。ガッチャーン。しーん。
熱いものが背骨を上ったり降りたりした。ぼくは、急いで鍵を元の場所に戻し、蛍光灯を消して、走って居間に戻って、しばらく何も写っていないテレビの画面を見ながら突っ立っていた。
三十分経った。そろそろ皆が戻って来る頃だ。心臓の鼓動が

高鳴り出した。ぼくは、再度決心して事務所に戻って百円銀貨二枚を取って来た。テレビを卓けて、「あなただけが知っている」というのを見ていた。見ているというポーズが、ぼくを安心させた。

八時四十分には皆陽気に笑いがら帰って来た。湯上りの臭いが居間にパッと満ちる。ぼくは、じっとテレビを見ている。翌日、経理の中年女が褪せた黄色の大声でギャアギャア叫んでいるのを、事務所の屋根裏の埃だらけの部屋で息を殺して聞いていた。

「また無いようになっとなあ。この前も計算が合わないかったんだよ。昨日、帰る時は確かに合うとったのに。また、四郎さんじゃろう。」父の三番目の弟の性になっっている。ぼくは心の中で、へへーと思いつながら忍び足でその場を逃げた。屋根瓦が、カタンと鳴ったけど、ぼくは、二階の祖母の部屋にたどり着くと、ゴロんと寝転んでフーッと溜息を吐いて、それから一時間位ぼんやりしていた。

父と経理の中年女に責められ、これも、いつものように、「わしは知らん」と、反対に怒ってパイとパチンコに行く四郎伯父さんが、かわいそおだなと思っただ。何とか、経理の中年女が計算をする前に盗れないものだろうかと考えた。

それにしても、今まで盗った分も、半分は四郎伯父さんの姓になっっているだろうと思つた。何だか、なしくなつて、四郎伯父さんのことばかり考えていた。

○ 雑記

「川端康成について」

四月十七日の昼休みの時間、山下内科の待ち合い室に入ってソファに向った時、朝日新聞電送速報の号外と、それを見ている二十五六の男を見た。新聞の上半分が折れて、見たことのある泣きそうなお顔写真が見えた。「死ぬべきだと思つたのだろ

だ。……やはり、死ぬべきだと思つたのだろうか？」やれやれ、おれは呪文を唱えている。

「ほんと、川端康成が死んだらしいですなあ。」と、勤務先へ戻って会社の上役に言った。

「ふん。川端康成は、わしの伯父のまたいとこじやん。わしの前の名前がホリバタ言っくんじやが。」

「へえー。またまた。嘘でしょ。」

「なにを言ふんやら、ほんまじやが。」

「へえー。ほんまですかあ。ふん。」

と、ぼくは、上役の横顔をながめながら、成程と、本当に感心してしまった。ギョロ目といい、苦勞した肌といい、そもそも上役の軍人根性はその証拠かも知れぬ等と、ぼくは思っていた。

三時間経った頃、ぼくは、ふと上役に「またいといつと、どういふことですかねえ？」と、たずねた。

上役は、びくりして、笑いが言つた。

「オサフネ君は単純じゃのお。あ、は、は。まだ分らんのかい。嘘じゃが。」

「ええ？嘘ですか。あ、洒落があ。エッヘッヘッ。」

「死のための文学」という言葉を思い出した。それは、去年の夏、甲府で古本屋に、たつたの二百円で売った「黒田喜夫全詩集」の中に出ていたように思う。

やはり去年の夏、ぼくは、ぼくのまだ誰にも言つたことのないことを逃亡中の望月泰明に言わねばならぬ。破目に陥つた。奴は道々じれったくなつて怒り出した。ぼくは、自分が奴をじらし

ていると思つた時、そんな自分が厭になつた。三つ目の喫茶店で、ぼく達の討論は始まって、終つた。

ぼくは、死ぬための文学」という言葉を、死めための文学」といふ言葉をはなれ、譲らなかつた。

が、社会的名称は総合サービス社の営業所なのだ。難民収容所といふ方が、その頃のぼくらには似合つてゐる。四畳半の田中の下宿

に帰つて、最終的には「死のための文学」という目に改められた。まいった。それがイケナカタ。妥協的に受け取られた。その後、一週間位して、ぼくは、奴に、奇異な絶交状態を強いられた。今も、そうである。原因の一つが、その言葉のよう

○ 連載日記ーオ五回ー

一九七〇年

四月二十四日 金曜日 AM 3:00

明幸温泉にて、Nと二人切りの湯舟に漬かつていると、頭はほとんどもろけて、まわりには、縮じ、骨の固くなつた長身のおじいさんが一人入つて来て、僕達に背を向けて湯に漬がり、湯だに足をのばして腰を垂せ、幾分かえめな声で、どこかは全然知らないが、どこなく聞いたことのあるような民謡を唄い始めた。最初、僕は、吃度、早湯に来て気分が良いのだらうと思つたが、くちくしょう、気遣い鳥め。何がコケコッポだ。しはらく、その後ろ姿を見ながらその民謡の抑揚に聞き入っていると、ふと、僕のおじいさんを思い出したのだ。頭のてっぺんが幾分とんがって、いて、白髪で長身で、唄をやつたというおじいさん。そっくりに見えたのだ。僕は体を洗ひながら、もし、軍人で、海軍少尉だったというおじいさんが、今、おばあさんが生きてゐるやうに生きていたら、僕の山梨学院大学斗争を何と言うだろうかと考えた。

先日、何かの話でNは、七十才から八十才の人は天皇制廃止賛成者の方が多いと言つて、それが、それは、明治維新で士農工商は廃止されたが、貴族だの何だのと階位は以前として強固に残存してゐたからだという。おもしろいではないか。僕に説教するが？それとも黙つて、このおじいさん見たいに唄ばかり唄つてゐるだろうかと、なあ、秀、銭湯の一番風呂もええが、日課になつてはもうおじいじやの。あ、し、なんと言ふかしら。保まで、連れと行きたい。